

# サマー・アート・スクール・展覧会

会期… 8月29日(土) ～ 9月3日(木)  
会場… ギャラリーTOM

マヤ・マックス「絵画ワークショップ・からだで描く」と、眞田岳彦「視覚を超える造形ワークショップ・生命をかたちづくる」で生まれた参加者の方々の作品を展示発表しました。



## 目次

### ■サマー・アート・スクール・レポート

視覚を超える造形 「生命をかたちづくる」 眞田 岳彦…6

絵画ワークショップ 「からだで描く」 マヤ・マックス…19

創造的な音楽ワークショップ

「創造的な声と動きの音楽づくり」 クリス・バートラム…47

鑑賞ワークショップ

見ることを問い直す6つのエクササイズ 長田謙一…63

### ■アーティスト・トーク

「いい絵ってなんだろう」 マヤ・マックス…31

*Summer Art School*  
*2009*



## 視覚を超える造形 ～生命をかたちづくる～ *EXPRESSIVE ART*

講師◆眞田 岳彦

衣服造形家、眞田造形研究所代表。1962年東京都生まれ。ISSEY MIYAKE INC. 勤務後、1992年から95年までロンドンに滞在。彫刻家Richard Deaconの助手を務めた後独立。自身の手でつむいだ獣羊毛などの天然繊維から先端技術による新繊維までさまざまな繊維を素材として作品を制作し、国内外で多数の展覧会を行なう。代表的な作品は、心のための衣服シリーズ『プレファブコート』や、一本の糸により造形した作品『遷移』など。また新潟県十日町に伝わる編布・アングンを再興するプロジェクトや、世田谷区民と行った綿のプロジェクトをはじめとする『日本繊維再考プロジェクト』も開催。女子美術大学・大学院特任教授。武蔵野美術大学、愛知県立芸術大学、東北芸術工科大学等客員教授。

### 生命を感じる形 生命を感じる感触

常に私達の最も近い距離にある衣服。それらの多くは、人間が何かをまとい始めた原始時代から時を経た現代でも、かつて命を持っていた物が素材に選ばれ続けています。それは無機質なものが溢れる時代も、人間が一番身近なものに生命を求めているかのようにです。ワークショップも動植物が織り成すさまざまな繊維に改めてふれることから始まりました。視覚以外の感覚をフルに使って感じとった「生命」を、繊維を巻きつけたり羊毛を平面や立体へ変化させたりしながら作品をつくり出します。



会場に並んだ6つつのテーブル。部屋の中心にあるテーブルの上と部屋の奥にはふくらみを持った真っ青なビニールシートが意味ありげにかけられています。会場の光景は、開始前から早くも、きょうこれから繰り広げられるワークショップの内容に興味を抱かせるものでした。ビニール・シートとテーブルの間にあるものは、もちろん後のお楽しみです。

「生命」からアートへ。新しいチャレンジが始まりました。

「生命」からアートへ。新しいチャレンジが始まりました。新しい「生命」からアートへ。新しいチャレンジが始まりました。



やがて、時刻はワークショップ開始の午後1時になり参加者も揃ったところで、今回のワークショップ講師、眞田岳彦さんが参加者達の前に立ちました。

「みなさん、こんにちは。眞田岳彦です。きょうから2日間『生命をかたちづくる』というテ



■自己紹介  
この日ワークショップには、小学生の子供から幅広い人達が集まりました。美術教室を開いている人、特別支援学校の先生、大学の教員や、趣味で服飾に携わっている人、そして視覚に障害を持つ3名。まずは自己紹介を兼ねて、参加者がどのような興味を持って足を運んだのか聞いてみました。

「繊維のやわらかさを活かした造形に挑戦してみたいです」  
「学校で図工で教えていて、授業で繊維を使う新しいアイデアになれば、と思い参加しました」  
「テーマが『生命』だったので、学校でもこうした活動を通して『生命』を伝える授業ができれば、と思っています」  
多くの人が答えたのは、このような、造形の材料としての繊維のおもしろさ、そして「生命」と「造形」という組み合わせの新鮮さに興味を持っていく人が多いようです。中には作品をつくるということばかり得意ではないけど、繊維をじかにふれること、触感に興味を持っている人もいました。  
文字通り、人と距離的にも身近な素材を使用するとあって、繊維自体にはみなさん魅力を感じているようです。また手芸が趣味という方も何人かいたという、ふだん衣服に加工されていない糸や布を手にすることがほとんどない方もいます。

## 生命の痕跡を感じる

1日目（8月12日）